

審査員

絵画

※川浪千鶴 ※喜安嶺松村武夫

立体

※荒木夏実 ※池川直池田清史

工芸

大谷早人 岡田皖 ※外館和子

書

青木幽碩 石川義象 島田香岫

※島谷弘幸 眞鍋憲二

写真

※藤村大介 山本巖

(※は県外審査員)

審査講評

■絵画■

日本画と洋画をあわせた絵画部門が誕生して2年目、昨年から微増した応募作品群には、引き続き課題だけでなく将来性も少しずつ表れてきているようだ。

香川県知事賞の谷原博信「聖母子」は一次審査の段階から群を抜いた存在感で異彩を放ち、審査員全員文句なしのトップ賞となった。薄く重ね塗りされた色彩は鈍く一見地味な印象を与えるが、見る人を釘付けにする強いイメージの光を放っている。平和のための意志と覚悟が託された作品は、洋の東西を問わない普遍的な祈りの心を喚起してくれる。

精神性をテーマにした知事賞とは対照的に、現実の世界を描いた香川県教育委員会賞の吉原功雄「向こう」では、リアルとは何かを探る眼差しがとても興味深かった。灌木の茂みは多視点的な視線を巧みに合成して描かれている。人間が目を使って見ることの限界と同時に可能性を教えてくれる作品である。

原風景的な景観と情感を描いた作品では、大北正明「1967南川分校」の天まで伸びた銀杏と校庭の鮮やかな黄色、安藤秀信「陽だまりの詩」のモノクロームの世界にほつんと滲ませた夕焼けの朱色、廃屋の構成が見事な川西加奈子「水仙の頃」の石垣の隙間に芽吹いた植物の若緑色が印象的だった。

故郷を象徴するのは祭り。中でも、踊り子だけでなく取り巻く人々を柔らかく丁寧に描き出すことで祭りの雰囲気やうまく捉えた塩田咲子「滝宮の念仏踊」、反対に獅子舞の頭を表情豊かにクローズアップで描くことで祭りのエネルギーを凝集、発散させた市原永知子「KAO」を評価した。

香川の食文化をテーマにした異色作として、干したうどんに囲まれた淡々とした作業風景がシュールな味わいを醸し出す岡崎正「乾麺の賑わい」、素麺とオリーブの簪をつけた舞妓姿の自画像が思い切りポップで元気な前田めばえ「日本の旬の食材と讃岐の名産」が審査員の注目を集めた。

児玉美鈴「葉」の桜は春の記号や意匠ではない。葉（ひこばえ）とは切り株や古い根元から生まれた新芽のこと、その圧倒的な生命力に触れた感動が作品に力を与えている。丸山心寧「feel someone」は夜の街路を描いた風景画に自分自身を投影した手作りのぬいぐるみを組み合わせ対峙させたインスタレーション。ジャンルの当たり前を見つめ直し、枠組みを超えるチャレンジ精神を応援したい。

限られた時間ではあったが、審査員3人で何度もじっくり作品を見つめ、言葉を重ねながらさらに見つめ直した。作品は作り終わった時が完成ではない、見られることで初めてアートになるのだから。(川浪 千鶴)

■立体■

立体の審査は、彫刻家としてキャリアを積んでこられた池川直氏と池田清史氏が制作者の立場から、またキュレーターおよび批評家としての立場から荒木が意見を出し、3人で議論しながら進めた。技術面、コンセプト面両方から一点一点を丁寧に観察し、有意義な意見交換を行うことができた。

香川県知事賞を受賞した富士士史「The universe (2023)」は、鎚を纏った迫力ある鉄の彫刻である。足を踏ん張りながらのけぞり、合わせた掌を天に向けて突き上げる身体のポーズが力強い。身体に絡みつく有機的なラインが、彫刻に動きを与えている。惑星を想起させる球体が、宇宙と人間との関係性を示

唆する。彫刻の持つ性質をうまく捉えた作品である。

香川県教育委員会賞の山端篤史「もやもや —flow away—」は、頭の中のもやもやという抽象的感覚を視覚化・彫刻化する意欲作である。高松市教育委員会賞の梶尾寛「実り」は、金属の堅牢さに繊細さを加え、上に向かって伸びていく動きが感じられる作品である。三豊市教育委員会賞の角田健夫「なぎさのいし」は、瀬戸内の海から触発されたイメージをキャンドルという形に転化し、光を灯すところまで考えたユニークな作品。風景を撮った映像と組み合わせたインスタレーションとなっており、波の音というサウンドも作品の一部である。奨励賞の園子綾人「頂」は、乾漆の技術を用いて恐竜の姿を表した作品。剥製でもフィギュアでもない意外な風合いを持った恐竜である。

受賞しなかったものも含め、どの作品からも作ることにの意欲と意欲、喜びが伝わってきた。ただ全体的に「コンセプト」がやや弱く感じられた。なぜ作るのか、なぜ「あなた」が、「今」作るのかという制作の必然性を考える必要があるのではないか。現代という時代になぜアーティストは作り続けるのか。それを誰に届けたいのか。そのような根本的な問いを発し、答え続けることがアーティストにとって大事なことだと思う。今後の課題として記しておきたい。(荒木 夏実)

■工芸■

応募総数は13点の減であったが、陶芸に次いで漆芸作品が多勢を占めていた点は、やはり玉椿象谷や音丸耕堂ら日本漆芸史の礎を築いてきた香川県らしい。特に漆芸を形から作ることが普及している香川県ならではの、立体表現としての漆芸の魅力は、香川県展の特質になり得ている。

最高賞の香川県知事賞受賞作、久保秀之の「乾漆花器「御塔石」」は、不規則な面取りによる形が極めてモダンであり、ミニマムな螺鈿の線がその現代性を引き立てている。漆芸はさまざまな加飾技法と共に発達した世界であるが、作者は「はじめに形ありき」の姿勢を堅実に示した。中央に入れたオトシも造形を壊すことなく、あくまでも自身の表現世界に徹している。

香川県教育委員会賞の島田誠「鉄茜花器」は、轆轤で挽いた形の彫らみを壊すことなく、微かなエッジで4つの面を取った。器の外側の深い茜色と高台付近の黒、および内側の黒が全体を一体感ある堅牢な世界にまとめている。

高松市教育委員会賞の北山圭一「炎」は、まずアシンメトリな形が美しい。黒い地に赤などの色漆を重ね、研ぎ出している。研ぎ出しの加減で炎の激しさを巧みに表現し、流麗な形の面の美しさを引き出した。

丸亀市教育委員会賞の高口幸子「天空の郷」は、四国の伸びやかな風景を幾何学的、抽象的に表現し、器の形も伸びやかに表現している。口の部分まで風景が続いているのも面白い。

坂出市教育委員会賞の磯井星児「菫醬盛器「閃光」」は、拡がりのある形に繊細な菫醬で壮大な宇宙と輝きを表現した。

奨励賞の藪内江美は、大振りの碗型の金胎に、菫醬で自然の風景を思わせる世界を築いている。黒漆と菫醬の色漆の関係がユニークである。

今回の全体的な質の高さをさらに受け継ぎ、拡張していく若き作り手達の登場も期待したい。まずは、会場を訪れ、作品を観ることで、学ぶ事は多いはずである。(外館 和子)

■書■

漢字、仮名、前衛、漢字仮名交じり文(調和体・近代詩文)、篆刻と幅広い作品の審査でした。香川県の各分野のレベルの高さと前衛の出品作品が多いことに驚かされた。

書作に当たっては、自らの個性や流行だけでは、作品制作が何れ行き詰まる。ところが、入賞作品を見ると分かるように、伝統的な古典作品を学書したことが窺え、それに加えて近年の流行と自らの美意識を加味した作品作りが出来ている。つまり、書の作品を制作するには、古典作品の臨書と創作に当たっての自らの感性を磨くという二つの要素が必要である。書では目習いと手習いと言うが、イメージトレーニングと技術の向上が必要ともいえる。これは、書だけではなく、他の音楽とスポーツなどにも共通することである。

書は造形と線質がもっとも重要であるが、今回の審査で、改めて行間・字間などの余白や行の流れが重要であることが再確認できた。

香川県知事賞の森本朝子さんの仮名作品「夏の月」は流麗な

線質でありながら、筆力の強さと空間のバランスの良さ、料紙との調和は誠に見事である。また、香川県教育委員会賞の高木聖蘭さんの「高明詩」は躍動感溢れる筆致を駆使した作品で、墨の潤濁、行の振幅による行間の変化が美しい。いずれも、品の良さと格調の高さを感じられる。書家は何かを書くかに心血を注いでいるが、一般の方は読もうとして読めない現実がある。読めない文字があると鑑賞を諦める人が多いが、筆の流れを追いかけると書作品を楽しむことができる。それこそが、書の鑑賞の魅力である。ことに前衛作品は分からない、という人も多いが、これまた余白などの空間構成と筆の動きによって筆者の感性を感じてほしい。書はほかの分野と違って作者の美意識を追体験できる。たとえば、作品の一部を隠して自分ならどう表現するかなどを考えると、さらに鑑賞の楽しさはわいてくる。出来れば、自らも筆を執ることをお勧めしたい。(鳥谷 弘幸)

■写真■

コロナで思うように撮影できなかったこの数年を、やきもきしながら過ごしてきた皆さんのうっぶんを晴らすような作品に多く出会え、さすがレベルの高い香川県だと感じた。

香川県知事賞の作品は、一見撮れそうだが実は作品の表現として完成させるには難しいシーン。この場面を学校写真などを撮影するプロが撮れば、左や下に見える人やマイクなどを排除し構成するだろう。しかしそれらが写り込むことでよりリアルな臨場感が出ている。感動的なシーンをより盛り上げるための一役に周囲の状況がある。写真表現とは、美しく構図が良く見栄えが良いだけではダメなのである。とても良い作品に出会え、感動した。香川県教育委員会賞の作品は森の中のカモシカ。一瞬で逃げたのが足元が写っていない。これも写真ならではの表現で、瞬間的なチャンスをものにした撮影者の技術がモノを言った。高松市教育委員会賞の作品は老夫婦のほのぼのとした仲の良さが際立つ作品。ヤカンやおにぎり、おじいさんの指など、さまざまな「モノ」が夫婦の愛を連想させてくれる。丸亀市教育委員会賞の作品は、シンプルでパターン化された構図の中、一目見て分かる田植えという文化的なシーン。モノクロームの作品は形を見せることが重要だが、この作品はとてよく整った構図と絶妙なタイミングで構成されている。三豊市教育委員会賞の作品は、遍路道の生木に彫られた仏像。お遍路さんの様子を魚眼レンズで上手く構成し、デフォルメされた形を逆に利用して木の迫力と共に神秘的なシーンとして捉えられている素晴らしい作品だ。東かがわ市教育委員会賞の作品は、手の皴と握りしめ力が入った指の質感が素晴らしい。モノクロームで仕上げた処理も成功した要因だ。

皆さまにこれから実践していただきたいのは、なるべく作品のイメージを頭に浮かべてからシャッターを押すこと。もちろん瞬間的に撮影しなければならない場合は仕方ないが、時間的に余裕がある場合はなるべく出来上りを想像すること、これが良い作品作りに繋がる。風景写真などは特にそうだ。また、今回の受賞作品は全て単写真。組写真は気持ちを表現するのに有利なはずだが入賞していないということは、自分の思いを上手く伝えられていなかったということ。組み写真の取り組みが上達すれば、県展の入賞も難しくはなくなるだろう。そのためには、やはり「イメージを先に想像すること」が必要だ。審査にはプリントやパネル貼りの美しさは考慮していないが、展示に来訪者に見ていただくという観点からすると、仕上げは美しくあるべきだ。その点で残念な作品があったこともここに記載し、今後に期待したいと思う。(藤村 大介)

入賞者一覧

■香川県知事賞■

聖母子 谷原博信 絵画
The universe (2023) 富森士史 立体
乾漆花器「御塔石」 久保秀之 工芸
夏の月 森本朝子 書
たった1人だけの卒業式 西山たかし 写真

■香川県教育委員会賞■

向こう 吉原功雄 絵画
もやもや一flow away一 山端篤史 立体
鉄蒔花器 島田誠 工芸
高明詩人 高木聖蘭 書
杜の番人 大柿好 写真

■高松市教育委員会賞■

水仙の頃 川西加奈子 絵画
実り 梶尾寛 立体
炎 北山圭一 工芸
「夢」 森紅汀 書
憩いの時 箸方陽子 写真

■丸亀市教育委員会賞■

天空の郷 高口幸子 工芸
光る水面 梅舎正敏 写真

■坂出市教育委員会賞■

乾麺の賑わい 岡崎正 絵画
蒟醬盛器「閃光」 磯井星児 工芸

■善通寺市教育委員会賞■

蘂 児玉美鈴 絵画
夢 黒田玉藻 書

■観音寺市教育委員会賞■

陽だまりの詩 安藤秀信 絵画
小蝶 白川葉子 書

■さぬき市教育委員会賞■

1967南川分校 大北正明 絵画
杜甫詩 嶋紅華 書

■東かがわ市教育委員会賞■

K A O 市原永知子 絵画
祈り 楠尾利則 写真

■三豊市教育委員会賞■

なぎさのいし 角田健夫 立体
仏の道 細川和彦 写真

■奨励賞■

「滝宮の念仏踊」(ユネスコ無形文化遺産に登録決定)
塩田咲子 絵画
日本の旬の食材と讃岐の名産 前田めばえ 絵画
feel someone 丸山心寧 絵画
頂 圖子綾人 立体
蒟醬盤「夜想曲」 敷内江美 工芸
自作詩 井上欣也 書
S-2368 大平祥子 書
わがやどの 田岡久子 書
河陰道 中村井青苑 書
春 森高和子 書
刀匠 白井正督 写真
群猿 中塚正春 写真
鎮守の森に命輝く 羽原純江 写真

第87回 香川県美術展覧会 展示作品数

区分部門	入選数	応募数	無鑑査	招待	審査員	特別展示(遺作)	展示作品総数
絵画	128	210	1	8	0	0	137
立体	12	20	1	5	2	1	21
工芸	21	35	1	4	2	0	28
書	173	385	1	2	4	0	180
写真	148	247	1	0	1	0	150
合計	482	897	5	19	9	1	516

「無鑑査」とは…
前回香川県知事賞を受賞した者。
「審査員」とは…
第87回香川県美術展覧会の県内審査員。
「特別展示(遺作)」とは…
香川県美術展覧会の発展に御尽力いただいた故人の功績を顕彰することを目的に、特別に展示する。